

2006年8月27日 聖霊降臨節第13主日礼拝

『神はあなたを救い出す』

(ダニエル6章19～25、使徒言行録23章23～35)

パウロの身に、またしても危険が迫っていました。ユダヤの最高法院で無実が言い渡されたにもかかわらず、これに業を煮やしたユダヤ人たちが、パウロ暗殺を企んだのです。この計画を知った千人隊長は、急いで行動を起こします。パウロの身柄を、安全な場所に移すこととなりました。こうしてパウロは、カイサリアの街にいる総督フェリクスのもとへと、護送されることになったのです。

千人隊長は、総勢470名の兵士たちに命じて、パウロを安全に送り届けようとしていました。それで、夜の九時などという時間に出発させたのです。昼日中を避け、夜闇の中を大勢の兵隊たちに守らせて、パウロを送り届けました。そうしなければ、パウロの身の安全を確保することができない。プロの軍人がそう考えるくらい、パウロに対するユダヤ人たちの憎しみは、激しいものだったのです。こうして主なる神は、異邦人たちの手を通して、またもパウロを、危険の中から救い出してくださいました。

さて千人隊長クラウディウス・リシアは、総督のもとにパウロを送り届けるにあたり、一通の手紙を書きました。その中身が、26～30節に記されています。それによると、「この者がユダヤ人に捕らえられ、殺されようとしていたのを、わたしは兵士たちを率いて救いだしました。ローマ帝国の市民権を持つ者であることが分かったからです」(27節)。これまで千人隊長は、パウロに対して、ずいぶんと思いやりのある行動をとってきたように思えます。それは、この千人隊長が、キリスト教に好意を寄せていたり、ユダヤ人嫌いで、パウロを特別扱いしていたからでは決してありません。千人隊長がパウロの身の安全をはかったのは、手紙にあるとおり、パウロがローマ帝国の市民であるとわかったからです。ローマ帝国の兵士は、いつどこにあっても、ローマ帝国の平和や秩序の安定をはかり、市民の安全を守るのが使命でした。ですからこの千人隊長は、ローマ帝国の法律と自らの務めにのっとって、当たり前のことをしたにすぎないのです。

ローマの軍人として忠実に、当然の務めを果たそうとした千人隊長。この常識人の目から見ても、ユダヤ人たちのパウロに対する怒りや企ては、普通ではありませんでした。そもそもユダヤ人たちが、パウロを訴えた理由は何だったのでしょうか。「わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました」(23章1)。というパウロを、ユダヤ人たちが訴えたのは、こういう理由からでした。21章28節：パウロは「民と律法とこの場所を無視することを・・・教えている」。「その上、ギリシア人を(神殿の境内に連れ込んで、聖なる場所を汚した」(21章28)。

しかしいつしか、最初の訴えはどこかへ吹き飛んでしまいました。後にはただ、パウロ憎しの感情だけが、ユダヤ人たちを支配しています。おそらくユダヤ人たちにとって、理由などはどうでもよかったのではないのでしょうか。理由はどうでもよい。何とかしてパウ

口を追い出したい、亡き者にしたい。そのことだけに、ユダヤ人たちは、凝り固まっていたのです。ユダヤ人自身の言葉からも、その本心がうかがわれます。彼らは最初パウロをこう訴えてました。パウロは「民と律法とこの場所を無視することを・・・教えている」、だから裁かれて当然だと。「民と律法とこの場所 = 神殿」がないがしろにされている。民が一番先に出てきます。この順序が、すべてを物語っています。「神の御言葉である律法」や「聖なる場所・神殿」を汚されたことよりも、「民 = 自分たち」がないがしろにされたことに怒っているのです。これでは順序がさかさまです。まことの信仰者は、たとえ自分がないがしろにされても、怒ることはしません。神の御名が栄え、ほめたたえられているなら、そのことをまず喜び、感謝します。パウロもそうでした、お前は疫病だ、ばい菌だと言われても、悪をもって悪に報いず、良きおとずれの言葉 = 福音をたずさえて、人々に接してきました。自分に反対する人々にも、忍耐強く、愛をもって、聖なる福音を語ってきました。この意味で、パウロが、ユダヤの人々をないがしろにしたことなど、ただの一度もありませんでした。愛するユダヤ人たちが救われるためならば、たとえ自分は「キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよい」とさえ、パウロは思っていたのです(ローマ9章3節)。

そういうパウロを、ユダヤの人々は理解しませんでした。亡き者にしようとさえしました。神を信じ、自分たちこそ神の民だと自認する人びとがです。このようすを、ローマの軍人、千人隊長が見ていました。世の中の常識人、千人もの兵士をたばねる指導者がみて、これはおかしいぞ、そう思ったのです。それで千人隊長が、ユダヤの最高議会を集めて調べさせると案の定。「彼(パウロ)が告発されているのは、ユダヤ人の律法に関する問題であって、死刑や投獄に相当する理由はないことが分かりました」(23章29節)。

こうして、パウロには何の罪もないことが宣言されました。当時のローマ帝国のあらゆる法律に照らしてみても、パウロには何の落ち度も罪もない。そのことが、ローマの職業軍人の口を通して、はっきりと証明されていきます。さらに言えば、これは、神様の、神様による無罪判決でもあります。パウロは何も悪いことはしていない。それは見よ、この時代を治めるべく神に立てられたローマ帝国。その国を代表する千人隊長すらも、このことを認めているではないか。そう、主は仰せになります。そればかりか、いまだ神を知らぬ異邦人の口を通して、神様は、おどろくべき言葉を語られます。「この者が告発されているのは、その信仰のゆえである」と。パウロが、執拗に追いかけられ、訴えられ、命すら奪われようとしたのは、なぜか？ それはパウロが、「死者が復活するという望みを抱いている」からにほかならない。わたしたちが十字架につけて殺したあのイエスを、主なる神がよみがえらせ、メシア・救い主としてお立てになられた。このことを信じ、この御方を宣傳伝えている。そのことが、ある人びとにとっては、おそろしく恐ろしかったのです。

意外な気がします。わたしたちの罪を喜んで背負い、頼る者を救ってくださるキリストが、なぜ怖いのか。いやなのか？ でも、深く考えてみると、わかる気がします。ユダヤ人たちにとって、もしイエスが復活したメシアであると認めてしまったら、それまで大切

にしてきた自分たちの歩みや信仰をすべて否定することになる。もしパウロの言うことを認めてしまったら、自分たちが正しいと思ってしてきたことは皆、大きな間違いだったことになる。イエスを十字架につけてしまったのは実に恐ろしい罪であり、われわれにとって裁きとなる。このことに、ユダヤ人たちは耐えられなかったのではないかと思うのです。

もしそうだとしたら、ユダヤ人たちの恐れは、わたしたちの恐れでもあります。わたしたちも、大なり小なり、同じ思いを抱いていたのではないのでしょうか？ 教会に行くのは怖い。敷居が高い。初めて教会に誘われたとき、そう思わなかったでしょうか？ 信仰生活を始めたあとでも、そうした思いにとらわれることがあります。今朝は教会に行くのがおっくうだ。なぜなら、あのユダヤ人たちと同じように、わたしたちも恐れているのです。イエス・キリストを本当に受け入れようとするとき、それまで大切にしてきた何かを棄てねばならない。献げねばならない。自分の過去が、歴史が否定されるかもしれない。そう恐れます。そして何より、わたしの過去が、わたしの罪が新たに暴かれることを、わたしたちは恐れているのです。あのユダヤ人のように。

しかし勇気を出してください。それらの罪は、すでにイエス・キリストが十字架の上で背負って、償ってくださったものです。すでに赦されたものなのです。信仰生活の中で、わたしたちが見せつけられるのは、すでに赦された罪にほかなりません。ならばなぜ、すでに赦された罪を、見つめねばならないのでしょうか？ それは、神の恵みに生きるため。神の恵みによってのみ生かされていることを、もっと知り、神に深く感謝するためです。

そもそも罪を知らなければ、わたしたちはキリストを必要としませんでした。どんな宝も富も、キリストに代えられない思えるのは、わたしの罪がどこまでも深いからです。この罪から、主イエスがわたしたちを救い出してくださいました。奈落の底から、わたしたちを拾い上げるために、ご自身、もっともって深い奈落の底に身を横たえられたのでした。それがキリストの十字架です。奈落の底で身動き一つできずにいるわたしたちを、主が背負って、光ある世界に、わたしたちをよみがえらせてくださいました。これが、主イエスの復活です。この主に結ばれて生きるとき、あの恐れは、いつしか消えてなくなりました。最初はあれほど怖くて、恐れていた罪が。わたしの罪そのものは、なおも消えずに残っていますが、罪ゆえのおそれは、なぜかふしぎと消えてなくなりました。主イエスに捕らえられているからです。主イエスがさしのべてくださった御手につかまっていると、なぜかふしぎに、心が熱くなるのでした。それは、まるで、神様の熱いぬくもりに触れているような気分でした。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3章16節)。パウロは、この永遠の命を証しました。自分自身を今なお生かし続けているキリストの復活を、その命を、雄弁に物語りました。聖書のみ言葉を通して、さらに自らの生き様をとおして、キリストに与る幸いを証し続けました。「重荷を負う者は誰もでも、わたしのもとに来なさい。休ませ

てあげよう。」 罪の恐れと不安をすべて、主にゆだねましょう。主より与えられた平安を、全身全霊をもって証しする者となれますように。祈り、行動を始めましょう。祈ります。

[説教者：堀地正弘牧師]